

富美子（ふみこ）おばさんの車椅子

ラジオネーム：水ようかん

年若い母が入院していた病院から家に戻ってくると、寝たきりで治療した影響で足腰がすっかり弱くなってしまい、今後の相談をするために実家に帰りがてら、かかりつけ医にも相談したく予約はしたものの、どうやって医院まで連れて行ったらいいか父に相談すると、「いいものがある」と一言。

実家に帰ると、玄関先には1台の車椅子が。

「これ、どうしたの?」と父に聞くと、「富美子さんのわね。」と一言。「富美子おばさんはそろそろ七回忌じゃないの?」これ、いつから家にあったわけ?」と聞くと、「一周忌のあと形見分けで頂き、そのまま物置で保管していたそうで、父口へ、整備にはあまり手間がかからなかったとのこと。

富美子おばさんは母の義理の姉で、子どもの頃、親に連れられておばさんの家に遊びにいくと、いつも珍しいお菓子をご馳走してくれたので、おばさんの家に行くのが楽しみだった。暑い夏には、冷たいおしぼりと麦茶を出してくれて、グラスのトトにはひまわりの花のような形のコースターがあった。「おばね、かわいね」と言ひやう、「古いものだ

けどね。それが好きなのかい、アハハ」って、いつも朗らかに笑ってくれて。

ある時、「おばさんは、旅行とか、どこか楽しかった場所があった？」って聞いたら、「沖縄の海がよかったねえ。大人になって、自分で稼ぐようになったら行ってみたいよ」って教えてくれたから、旅行で沖縄へ行くのが目標になったの。

内臓の病気が1つから2つになり、さらに重なっておばさんの身体が思うように動かなくなってからは「ちゃんとしたお構いもできなくて、「ごめんね」って、いつも口癖のように言ってたっけ。おばさんはもてなし上手だったから身体が動かなくなって気が利かなくなったと思われるのが嫌だったんだね。

おばさんが大事に使っていた車椅子には、今、母が乗り、母は、富美子おばさんが頑張って生きた姿に励まされているかのようにです。